

Session 記号	D. 言語行動・日本語教育 (2014.3.22 於 北京日本学研究中心)
タイトル	中日協働遠隔日本語授業の実証研究
著者名(所属)	大塚 薫 (高知大学・安徽大学)
連絡先 Eメール	kaoru@kochi-u.ac.jp, kaoruotsuka@hotmail.com
<p>論文内容</p> <p>(背景および研究目的)</p> <p>本研究は、特別な施設を使用せずに教室内にインターネットに接続可能なパソコン並びにウェブカメラとマイクを持ち込み、画像通話が可能な無料で配信されている Skype を使用した日中間の遠隔協働日本語授業実践の効果を検証し、協定校間においてどのような遠隔協働授業が行えるかを述べたものである。</p> <p>現在までに著者が日本と韓国の間で行った遠隔教育では、無線インターネット環境を利用し双方の教室に複数のパソコンを持ち込み、少人数のグループ別討論を主体とした授業を構築することができた。しかし、中国のインターネット環境を鑑みると、両方の教室に1台ずつパソコンを設置し、Skype による1対1の相互交流にならざるを得ないのが現状だと言える。</p> <p>(検討方法等)</p> <p>2012年と2013年の10月から12月にかけて、協定校である高知大学(日本)と安徽大学(中国)の既存のカリキュラムであるアカデミック日本語の授業において、双方の学習者の遠隔討論を主体とした授業を構成した。具体的には、前者は同じ映画を視聴し感想文を書いた上で遠隔討論を行った。後者は、協定校の強みを生かした日本語教育専門以外の教員によるオムニバス形式の教員相互扶助型の授業を構築し、その授業の主題に沿った討論を日中の学習者が繰り返すという協働授業を実施した。これにより、日中双方の学習者が質の高いアカデミックな日本語に接し視野をより広げることができるとともに、学習者自身の日本語能力を省みる機会にも繋がり、さらには中国の学習者の日本留学に対する予行演習として留学の呼び水にもなると考えたためである。</p> <p>(結果および考察)</p> <p>このような一連の授業を行った結果、学習者は遠隔授業方式に関しては概ね高い評価であり、授業内容に関しても事前準備を整えて臨む遠隔討論形式の有用性が実証された。この形式の授業は、異文化理解、異文化交流、遠隔による授業方式、日本語学習、日本語技能における内省の面で効果を有する反面、ネットの回線および教室の設備の不具合や接続時間の長さ、授業内容面、特に遠隔討論方法において改善点が挙げられた。</p> <p>(結論)</p> <p>しかし、普段教室で行っている講義がネットを通して容易に海外の協定校に提供し受講できる点、双方の学習者および教員がリアルタイムで日本語を介した交流ができる点、留学前に協定校についての情報が得られ双方の繋がりが持てる点などは利点であると考えられる。</p> <p>(附記)</p> <p>本研究は、平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号23520634「遠隔チューター参加による少人数グループ化日本語授業の有効性に関する研究」(研究代表者:大塚薫)の助成を受けて実施された研究である。</p>	
<p>参考文献</p> <p>大塚薫(2013)「遠隔日本語教育の現況と展望」『韓国日語教育学会 2013 年度第 23 回国際学術大会 proceeding』pp. 46-49、韓国日語教育学会</p> <p>大塚薫・王勇萍(2013)「日中二大学間協働日本語遠隔授業の構築—授業内容の樹立を中心に—」『高知大学留学生教育』第7号、pp. 65-81、高知大学国際・地域連携センター国際連携部門</p> <p>斎藤麻子・大塚薫・若月祥子・林翠芳(2013)「Skype を使ったアカデミック日本語授業の試み—日韓協定校の事例—」『日本言語文化』第25輯、pp. 225-243、韓国日本言語文化学会</p> <p>若月祥子・大塚薫(2012)「読み手を意識した作文授業の試み—日本人学生を遠隔チューターとして—」『日本学報』第93輯、pp. 43-52、韓国日本学会</p>	